

分析・考察

まず、DD(発達性読み書き障害)が顕在化しにくい理由として、DDがASD(自閉スペクトラム症)やADHD(注意欠如・多動症)など他の発達障害と併存することが多く、行動や情緒の特性のほうが注目されやすいことが挙げられる。また、「全く読めない」「全く書けない」ではなく、その状況が環境や本人の特性や体調等によって変わるということも、更に周囲の理解を難しくしている。発達障害者自身、「読み」「書き」そのものは決して嫌いではなく、むしろ、自分のペースで、興味あることを読み書きするのであれば、得意かもしれない。しかし、仕事として一定の速さ、正確さを求められると、困難な状況が生じるのは、支援者や親からのヒアリングで挙げられているとおりである。

発達障害者本人へのアンケート集計では、自分の得意なこと(複数回答のため全体は321%)は「ひとりで物事に取り組むこと」が最も多く(41%)、次いで「文章を読むこと」(29%)、「最後まで作業を完成させること」(26%)の順であった(表 1-2-1)。「文章を書くこと」も(17%)が得意なこととして挙げており、「文章を読むこと」「文章を書くこと」が得意だと思っている人もいることがわかる。

しかし、発達障害者の親へのアンケート集計では、読み書きについての親の本人へのサポート状況は、「文書の内容の説明・確認」が54%と最も多く、次に「提出期限など文書の管理」が42%となっており、文字や文章の読み書き等、文書については親や家族が支援している状況が伺える。親は子どもの現在の読み書き困難の状況として、「本人だけでは障害者手帳の更新など役所等への書類が作成できない」ことを一番に挙げており、働こうえでも「文書の内容把握のためには説明が必要」「報告書等の書類が書けない」が多かった。「読み書き」等について、「安心して気軽に相談できる窓口が必要」という回答も73%と圧倒的に多い。読み書き困難についての、発達障害者本人と親との意識の乖離が認められる。

しかしながら、発達障害者は自尊感情の低さが多くの研究により指摘されているが、本事業のアンケート結果では、得意なものは特にないという回答があるものの、「新しい方法やアイデアを思いつくこと」や「計算すること」などが、少なからず自分の得意なところとして挙げられている。適切な環境が設定されていれば、自己肯定感を損ねることなく生活していけることを示している。

発達障害者の読み書き困難における社会的障壁であるが、街中の看板や交通機関の表示については、「文書を読むこと」が苦手な人は、「バスや電車の行き先などが読みにくい」「案内図などの字や説明がわかりにくい」「絵のサイン(表示)も意味がわからないものがある」割合が多かった。「読み書きに時間がかかる」人は、「流れるテロップなどは読みにくい」割合も高く(表 1-3-1-2-2)、「ディスレクシア」の診断がある人は、「アルファベットの表記などがわかりにくい」割合が高い(表 1-3-1-4-2)。

商品や製品の説明書・契約書については、「どこが重要かわかりにくい」「説明文がわかりにくい」人が多い(表 1-3-2-1)。「文書を読むこと」が苦手な人は、「文字ばかりで読みにくい」「字が小さい」点を挙げている(表 1-3-2-3-2)。

わかりにくい書類としては、20才代では「健康保険や年金など役所からの書類」「契約についての書類」、30才代では、更に「銀行や郵便局など金融機関からの書類」「証券会社や保険会社などからの金融商品についての書類」も加わり、年代が上がるにつれて、わかりにくい書類が多くなっていく。各年代で触れることが多い書類に対して「わかりにくい」と答える人が多い(表 1-3-3-2-2)。

わかりにくい書類に対して求める支援は、「質問に丁寧に答えてくれる人」「わかりやすい書類の記入例」「相談に乗ってくれる人」が欲しいという割合が多い。年代に関係なく、ICT等を利用した支援より、「人」の支援を求めていることが伺える(表 1-3-3-6-2)。

また、「文書を読むこと」が苦手な人は、「作成した書類の確認を気軽に頼めるところが欲しい」割合

が高い(表 1-3-3-8-2)。「読み書きに時間が掛かる」人は、「重要な箇所がわかるような書類にしてほしい」「わかりやすい書類の記入例がほしい」といった割合が高い(表 1-3-3-8-2)。本人がどのような読み書きの工夫をしている、本人宛の書類はわかりにくい点も示されている(表 1-3-3-9-2)。

働くうえでの困難さとしては、「文書の内容把握のためには説明が必要」が47%で最も多く、次いで「報告書等の書類が書けない」の41%となっている(表 2-3-2-1)。「ディスレクシア」の人は、「読み書きが苦手なので、職種が限られる」「仕事に必要なメモがとれない」「文書の内容把握のためには説明が必要」「文書の読み書きに時間が掛かる」「報告書などの書類が書けない」といったすべてに困っている(表 2-3-2-2-2)。また、「年末調整の書類」や「履歴書の記入」、「電話や伝言のメモ」の困難も多く、特に「文書を読むこと」が苦手な人は、「電話や伝言が正しくメモできない」ことで困っている割合が高い(表 1-3-4-3-2)。

子どもの学齢期における読み書きについての療育や指導については、「ない」(52%)ほうが「ある」(47%)より多く、半数を超えている(表 2-1-6-1)。学校で読み書きの指導を受けたことがある「ディスレクシア」と「協調運動障害」は「通級」で受けた割合が高い。一方、学校で読み書きの指導を受けたことがある「チック・トゥレット症」は「通常の学級」でのみ(100%)となっている(表 2-1-6-4-2)。また、「診断・判定」を受けた時期が早いほど、読み書きについての療育・指導につながっている。中学校以降に「診断・判定」を受けた場合は、読み書きについての指導を受けていない割合が高い(表 2-1-6-5-2)。早期発見・早期支援の重要性を示唆するものと言えよう。

文章の読み書きの苦手さを補う手段として本人が身に付けている方法としては、診断名に限らず「パソコン・スマホなどの利用」が46%と一番多く、「パソコンやスマホで漢字を確認」している。支援者のヒアリングにもあるように、「携帯では短い文で送受信することが多く、携帯を使うようになって文章がうまくなった」ということから、周囲の誰もが使用している汎用性のある一般機器が、本人にとっても使いたいという気持ちが続く、使いやすいものであるといえよう。一方で、診断名に限らず「IT 機器の音声入力ソフト」や「紙の書類にパソコンで入力できるソフト」の利用の割合は低い。発達障害者本人からのヒアリングでは、キーボード操作よりスマホの親指入力のほうが体への負担感が少ないといった意見も複数出ていたことから、場所を選ばず、操作性の高い機器のほうが、日常の生活に合わせて、それぞれが使いこなしやすいと考えられる。

「ディスレクシア」の診断がある人は、提出書類を「鉛筆で下書き」したり、「複数枚コピーして書き直してできるように」といった工夫をしている割合が高い(表 3-1-3-2)。

読み書きが苦手だと認識している場合は、していない場合と比べて、IT 機器の読み上げソフトや音声入力ソフト、紙への PC 入力ソフトなどの利用に積極的ではないかと予想していたが、両者にそれ程の差はなく、自分は読み書きが苦手だと思っても、IT 機器の読み書き支援ソフトの利用は多くないことがわかった。IT 機器のソフトの利用等は、おとなになって便利だからと積極的に利用するのは個人差が大きく、学齢期から、自らに合った使用方法を試行錯誤しながら取り入れていく過程があってこそ、仕事や生活に役立つものとして、情報にアクセスして取り入れ、機能するものであることを示しているといえる。

「読み書き困難についての自己理解」については、すべての「診断名」で「字を読むこと」「文章を読むこと」が苦手だと思っている割合は低い(表 3-1-2-2)。しかし、「読み」と「書き」を比べると、すべての「診断名」で、「字を読むこと」「文章を読むこと」よりも「文字を手書きすること」が苦手だと思っている割合は高く(表 3-1-2-2)、本人は「読む」ことより「書く」ことへの困難を認識しやすいと言える。それは、支援者のヒアリングにもあるように、どう見えるかは生まれ持ったものなので、本人にもそれが読みにくい状況だとは気がつきにくい、「書く」ことについては、周囲も書いたものがわかるので、「間違っ

いる」「おかしい」という指摘が入りやすいことによるものと思われる。

読み書き困難は、「全く読めない」「全く書けない」わけではないが、読み書きにかなりの努力が必要で、時間が掛かってしまう。本事業では、読み書きが苦手な人に文字によるアンケート調査をするという方法を選んだため、読み書き困難がある人の参加は難しかったと考えられる。その点では、他の多くの調査などにおいても、読み書き困難がある人は自分の意見を反映させにくいということになる。読み書き困難がある人の参加を容易にし得る調査方法については、今後の課題といえる。情報へのアクセシビリティの確保や社会参画という側面からも、重要なことと考える。

検討委員会の実施状況

○検討委員会の設置

平成30年9月28日付の本事業採択内示を受け、7名の検討委員を選定し、承諾を得て、同年10月1日、検討委員会を設置した。

〈検討委員〉

- 竹田 契一（大阪教育大学名誉教授・大阪医科大学 LD センター顧問）
- 奥村 智人（大阪医科大学 LD センター）
- 若宮 英司（藍野大学医療保健学部看護学科教授）
- 品川 裕香（教育ジャーナリスト・編集者）
- 高山 恵子（NPO 法人えじそんくらぶ代表・臨床心理士・薬剤師）
- 井上 育世（特定非営利活動法人全国 LD 親の会）
- 東條 裕志（特定非営利活動法人全国 LD 親の会）

○第1回検討委員会

日時：平成30年10月20日（土）18:00～21:00

場所：大阪府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター）4階 小会議室2

出席：竹田契一・奥村智人・若宮英司・品川裕香・高山恵子・井上育世

オブザーバー：田中尚樹

（厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 障害児・発達障害者支援室）

欠席：東條裕志

〈議題〉1.事業実施計画及びスケジュール

2.アンケート調査について

(1)アンケート調査概要

平成30年10月23日 アンケート印刷・発送予定（2000部送付予定）

平成30年11月20日 アンケート回答締め切り

- ・親用アンケートでは、成育歴・親から見た現状を中心に設問
- ・本人用アンケートでは、読み書きについての社会的障壁を訊ねる設問

(2)アンケート内容検討

a.親用アンケート用紙

- ・読み書きについての療育・指導場所を加筆修正
- ・「幼児期の困難さ」について検討・修正
- b. 本人用アンケート用紙
 - ・苦手なこと項目選択肢について検討・修正
 - ・医療機関の書類・役所の書類の設問を「読み書き」について内容整理
- (3) アンケート結果分析予定確認
- 3. ヒアリング調査
 - (1) 本人へのヒアリング調査
 - (2) 支援者・支援機関へのヒアリング調査

○第2回検討委員会

日時:平成31年2月23日(土) 18:00-21:00

場所:大阪府立男女共同参画・青少年センター(ドーンセンター)4階 小会議室3

出席:竹田契一・奥村智人・若宮英司・品川裕香・高山恵子・東條裕志・井上育世

オブザーバー:田中尚樹

(厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 障害児・発達障害者支援室)

〈議題〉1. アンケート調査

- (1) 経過報告 (2) 配布数報告 (3) アンケート回収数報告 (4) 最終データ数確認
- (5) 分析・クロス項目 検討

2. ヒアリング調査

- (1) 本人へのヒアリング確認 (2) 支援者・支援機関へのヒアリング確認
- (3) 親の座談会について

3. 事業担当者によるまとめ会議 平成31年2月9-10日

事業の状況確認・報告書作成等まとめ作業分担・スケジュール確認

4. 事業成果の情報発信について

○ヒアリングについて

発達障害者本人へのヒアリング:品川裕香(教育ジャーナリスト・編集者)

支援者へのヒアリング:井上育世(NPO法人全国LD親の会)

成果等の公表計画

本事業の成果については、下記のように公表する計画である。(平成31年3月末現在)

- 特定非営利活動法人全国LD親の会のホームページへ掲載 <http://jpald.net/>
- 2019年6月16日(日) 第18回全国LD親の会公開フォーラム
 - 14:45~16:30 シンポジウム(厚生労働省平成30年度障害者総合福祉推進事業報告)
 - 会場:国立オリンピック記念青少年総合センター
- 日本LD学会第28回大会親の会企画シンポジウム
 - 会場:パシフィコ横浜 会議センター